

【大豆坂街道】

大豆坂(まめざか)街道は、江戸時代に羽州街道の浪岡から油川湊、さらには堤まで抜ける近道でした。小金山神社に寛文5年(1665)に越前国新保の中村新兵衛から寄進された笏谷石の狛犬があったり、大星神社に江戸の本郷湯島にあった米問屋「津軽屋」の当主三右衛門・刈谷望之が文化6年(1809)に寄進した花崗

岩の鳥居があったりという具合に、街道の界限には湊との結びつきを語るものが遺っています。この街道は、中世に浪岡と湊を結びつける役割を果たしていた「奥の大道」の一部分であったと考えられています。



※印はP7【青森の城址・縄文遺跡を参照】

妙見の追分石 1



文久4年(1864)に作られたこの追分石には、「右弘前 左横内」と刻まれています。大星神社(妙見堂)は横内方面に荒川を渡った場所にあり、さらに進むと横内城跡の常福院があります。荒川に沿って進むのが大豆坂街道で浪岡に至ります。

大星神社 2



明治時代の神仏分離以前は「妙見宮」あるいは「妙見堂」と呼ばれていました。また、妙見菩薩が北斗七星であるところから、「北斗寺」ともいいました。天文年間(1532~55)に編まれた『津軽郡中名字』にも「妙見堂」の名が見えることから、少なくとも16世紀以前にその成立を遡ることができます。この神社の宝物には、中世の舞楽面があります。

大星神社の舞楽面 2

ここに遺された鎌倉時代の舞楽面は9面。わけても陵王・納曾利は動眼吊頭で、後の時代には忘れられてしまう技法で作成されました。遺された面から、厭舞・案摩/ニノ舞・散手/貴徳、抜頭/還城楽、陵王/納曾利、などの舞があったと推測できます。

菅江真澄は寛政7年(1795)から8年にかけて何度かこの辺りを歩いていますが、寛政8年5月4日に「七面(ななおもて)とも、むかしは十二面ありたりしとも」(『すみかの山』)と書いています。

舞楽の面は、青森県には南部の櫛引神社に8面、津軽の岩木神社にも5面以上あり、大星神社の面と合わせれば

これだけで東北地方に伝わる中世・近世の舞楽面の半数近くになります。大星神社の舞楽面の数は、東北では二戸郡浄法寺町の天台寺がもつ10面に次ぎます。地方の社寺にこれだけのまとまった舞楽面が遺されていることはきわめて稀です。

大星神社の鳥居 2



花崗岩でできた大星神社の四の鳥居は、江戸本郷湯島の米問屋「津軽屋」の当主三右衛門・刈谷望之が文化6年(1809)に寄進したものです。この刈谷望之は『日本国現報善悪霊異記攷証』『和名類聚抄箋註』などを著した披斎のこと。津軽屋は、弘前領の米を青森湊から江戸へ運んで商っていました。鳥居が寄進された文化6年に、蝦夷地警衛を命ぜられた弘前藩主寧親もこの社に神器と額を奉納していることから、津軽屋の寄進も蝦夷地警衛に絡んだものと思われる。妙見堂と青森湊の関わりを示すものです。

大豆坂街道の松 3

寛政から文化のころにかけて植えられた大豆坂街道の松並木。第二次世界大戦の折、松根油を採るために伐られ、2本が遺るのみとなりました。



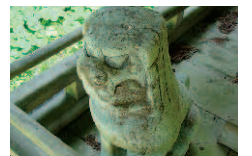
高田の追分 4

大豆坂と入内の追分がここにありました。いまは松が遺っています。



小金山神社 5

小金山神社に寛文5年(1665)に越前国新保の中村新兵衛から寄進された笏谷石の狛犬があります。笏谷石は越前福井の足羽山(あすわやま)で採れる青みがかった石で、加工しやすいことから、北前船で運ばれました。笏谷石の狛犬は、津軽には、弘前八幡宮・熊野奥照神社・清水観音(目屋多賀神社)にあり、いずれも寛文4年に奉納されています。小金山神社の狛犬は、これより1年遅いのですが、河村瑞賢によって西廻り航路が確立する寛文12年より旧く、大豆坂街道と日本海海運との結びつきを物語っています。



入内観音 6

津軽三十三観音札所巡りの24番札所。明治時代の神仏分離で、小金山神社と分離。松前など道南からも参拝があり、海の道との関わりが今日まで続いています。冬の間、大豆坂街道は入内を歩いたといえます。



大豆坂地蔵 7

大豆坂街道は、ほぼ現在の青森空港有料道路に近い場所を通っていますが、正確にはこの地蔵から山の中を王余魚沢(かれいざわ)へ抜けました。

